

〈巻頭言〉

西洋史特集号〈西洋史における コスモロジー研究の課題と現状〉

豊 川 浩 一

本年度第2号の『駿台史学』は西洋史特集号です。テーマを「西洋史におけるコスモロジー研究の課題と現状」としました。古代・中世・近代における西洋の支配秩序とコスモロジーの関係を解明しようとするものです。西洋の歴史は、いわば地域に特有の環境と風土の中で育まれた宇宙観・死生観・価値観が、国家や地域権力による秩序化の動きに、対立したり、連携したり、ときには大きな障害となり、ときには欠くことのできない基礎となった歴史の繰り返しです。その複雑で矛盾する関係を具体的な事象の展開するプロセスを通して捉えていこうとするのが本特集号の狙いです。

西洋世界は古代以来、様々な文明が出会い、文化が交錯した歴史を持ちます。それだけではなく、それらの諸要素を包み込んだ大きな世界秩序としての「帝国」をも生み出しました。日々の暮らしのなかで、人々の意識に刻まれた自己を取り巻く世界に対する表象がどのような形で権力による秩序化に作用し、あるいは利用されていくのでしょうか。また「帝国」の盛衰・交代は即座に生活の転換をもたらすものではないのですが、支配と被支配の秩序関係が動揺し崩れた後に、いかなる価値観が人々を捉えていくのでしょうか。こうした課題をその時代に生きた人々の具体的な活動事象から掘り起こし、それを歴史的・空間的に跡付けることを目指すのが本研究です。6名の執筆者によって、時代と地域を越えてそれを行おうとするものです。

山川論文は、考古学の成果に基づいて、ミュケナイ期ギリシアにおける宗教儀式が行われた聖所について論じています。この時期の聖所は人びとの居住地にあり、宗教儀式はそうした生活の場で行われました。しかも、こうした聖所は、近隣に権力者や有力者のトロス墓が存在することから、そうした人々の権力の維持や強化のために行われた祭儀の宗教施設であったと考えられます。

古山論文は、神意を宿らせようとする意識が働いていたとされるアルカイック期クレタの法碑文を中心に、そこに表れる「神の法」と「神意の法」によって紡がれた法の観念世界を表そうとします。そこにこそ法碑文の存在価値があったとしています。

遠山論文は、13世紀のフェクナム・フォレスト巡回裁判記録をもとに、フォレスト犯罪の

具体的様相をさぐり、フォレスト法の運用とその実効性について検討しています。これによって、フォレスト犯罪の多様性、フォレスト規制の煩雑さ、およびフォレスト行政の杜撰さが浮かび上がってきます。

齋藤論文は、慣習法文書を史料として、南ネーデルラントのエノー伯領における都市・農村共同体が享受する「自由」の内容について考察しています。文書の発給年代や内容を検討すると、「自由」は従来認識されてきた以上の広がりを持つことがわかります。また共同体と領主権力との関係も多様なものであったようです。

豊川論文は、18世紀ヴォルガ中流域の都市で発生した「呪術師」事件を題材に、近世ロシアにおける国家・教会・社会の相互関係を明らかにしようとした研究です。そこから浮かび上がるのは、「社会の規律化」を図ろうとする国家とそうした意図から後退していく教会の動きでした。

高田論文は、第二次世界大戦を通じて、時の大統領フランクリン・D・ローズヴェルトが提唱した「新しい地理認識」がアメリカ国内に浸透していった過程を考察しています。戦時に普及することになる新しい世界地理認識が、多元的な戦後構想に影響した点を明らかにしています。

もちろん、ヨーロッパ史におけるコスモロジー研究については、以上の6名の論文が全てを代表しているわけではありません。しかしながら、上の研究を通して、幾らかなりとも上記課題に関する研究の最前線を示し得たのではないかと自負しております。会員諸氏の忌憚なき御意見など賜ることが出来れば幸いです。